

短期海外研修プログラムの効果と役割

尚美学園大学総合政策学部准教授 木村 啓子

Keiko Kimura

1. 短期海外研修の現状

日本の多くの高等教育機関では、短期・中期・長期の様々な目的・形態の海外留学プログラムが用意されており、数多くの学生が参加している。近年では日本から海外へ留学する学生数の減少が度々伝えられているが、日米教育委員会の資料（2011）によると、日本からアメリカへの留学生数は全体としては減少傾向にあるものの、学位取得を目標とせずに留学をする（英語集中コースなど）日本人留学生数は、過去3年間（2008-10年）では、むしろ増加傾向にあるということである。こうした変化は、現在の困難な経済情勢を反映したものであるかもしれないが、同時に長期間海外に行って単位取得などの苦勞をしたくない、といった昨今の若者の気質を表した部分もあるかもしれない。そうした傾向があるからこそ、短期海外研修が参加者にもたらしてくれる語学面、情意面の効果には注目に値すべきものがある、と私は考えている。期間の長短に関わらず、海外留学の効果は語学面のみに留まらず、意欲の向上、社会文化的意識の向上など情意面にも観られることは、参加学生に直接接したことのある教員ならば誰でも強く感じるものなのではないだろうか。実際に短期海外研修を経験した学生がその経験から後に、中・長期の留学を志すようになるケースは少なくない。

2. これまでに実施してきた短期海外研修

私の勤務する埼玉県川越市にある尚美学園大学では2000年に4年制大学としてのスタートを切ってから、2000年度より2010年度までに、11回の短期海外研修を実施し、計124名の学生が参加してきた。この数字は、語学関連の学科を持たない学生総数約3,300名の中規模大学の実績としては、多いとは言えないまでも決して少なくはないものと考えている。研修のスタイルとしては、どのプログラムも期間は約3週間、日本人は1人のみとの条件でのホームステイ、午前中は英語研修、午後は観光や見学、ボランティア活動などのアクティビティー、もしくはフリータイムというもので、現在、多くの日本の高等学習機関で実施されている短期海外研修プログラムのスタイルとしては、最も一般的なものであろうと思う。研修先と回数はこれまでに、アメリカのワシントンD.C. 1回、カナダのバンクーバー2回、イギリスのオックスフォード1回、ニュージーランドのハミルトン2回、と回を重ね、現在はニュージーランドのクライストチャーチに落ち着いており、これまでに5回の研修を実施してきた。



人間よりも羊の方が多き国
ニュージーランドのファームステイ先にて

東日本大震災の被害規模の想像を絶する大きさのために忘れられがちではあるが、2011年2月22日、ニュージーランドのクライストチャーチで大地震が発生し、ちょうどクライストチャーチにおける第5回目（通算11回目）の研修4日目であった本学学生11名が、その影響で研修を中断せざるを得なかったことは大変残念であった。幸いにも本学の引率教員、参加学生は全員怪我もなく無事であったが、この地震で犠牲となられた方々のご冥福をこの場をお借りして祈らせていただきたい。海外研修中の事故というものは、私にもとても他人事とは思えない。

本学の来年春のクライストチャーチでの研修は、様々な状況を考慮に入れて見送らざるを得ない状況であるが、これまでに研修先を試行錯誤の結果、ニュージーランドに落ち着かせている理由としては、やはり何よりも現地の治安の良さが挙げられる。もちろんどこにあっても油断は大敵で、気を抜いていては何が起こるかわからないのはしごく当然のことである。次いで理由は、現地の人々のホスピタリティ精神の高さである。年々、少しずつ状況の変化を目にしてはいるものの、平均してクライストチャーチにおけるホームステイ先の質については、個人的にはかなり高く評価しており、街の人々の親切さにも強い印象を受けてきた。前述のとおり、本年2月のクライストチャーチでの研修は地震のために中断を余儀なくされたが、地震後に本学学生が現地の人々から受けた温かい心遣いや配慮は印象的なもので、実際に、被災した11名の本学からの参加者のうちの2名が、もう一度、何としてもクライストチャーチに戻って勉強したい、と現在それぞれ3カ月、6カ月の中期留学を決行中である。



クライストチャーチのシンボル・大聖堂
(残念ながら、2月の地震で半壊してしまいました。)

3. 短期海外研修の効果

たった3週間や4週間の海外研修に行ってもその効果などは期待できない、高いお金を使ってただ遊んでくるだけのもの、という声を耳にすることはよく有る。けれども前述のように、短期海外研修に参加した学生に多く接する機会のある方は、参加学生の変化に大なり小なり、気付かれているものと思う。実際、若いということは素晴らしいことで、参加学生は例え短期であっても新たな海外の空気に触れ、異なる文化の中に飛び込んだ結果、大きな変化を見せてくれるのである。そうした変化を少しでも何らかの目に見える形で表せないものかと、ここ数年取組んできた語学面、情意面の変化についての調査の試みの結果を以下に述べさせていただきたい。

3.1 短期海外研修の語学面の効果

一般的に言って、最もその効果が期待されないのが語学力のアップであろう。そうした風潮に違和感を覚え、私が最初にデータを取り始めたのは2005年春の研修時であった。研修開始の約2週間前と研修終了の約3週間後に、英検準2級の過去問題を若干短縮したものを使用して、テストを実施した。具体的には、文法・語彙問題10問、ライティング（整除）問題5問、リーディング問題7問、リスニング問題30問の計52問から成るテストであった。2005年の研修参加学生10名に、2006年の参加学生（同じ手順で同じ試験を行った）のデータ9名分を合わせ、合計19名として分析を行った（実験群）。2年度分のデータを併せて研究を進めたのは、2回の研修自体の内容がほぼ同一であり、総数を大きくした方が分析の信頼性が高められると考えたことによる。同時に研修に参加しなかった48名の学生にも2005年の同時期に同じ要領で試験を実施した（統制群）。

上記の2群の試験結果につき2元配置の分散分析を行った結果、英語テストの総合点では研修前の2群の英語力に有意差はなく同レベルであったが、研修後には5%水準の有意さで実験群の英語得点が統制群のものよりも高いものとなった。また両群それぞれの平均点につき、研修前後の比較をする t 検定を行ったが、統制群には前後で有意差が見られず、実験群では5%水準での有意な伸びが認められた。実験群の結果を部門別に見ると、文法・語彙部門、ライティング部門、リーディング部門では平均点はそれぞれ上がってはいたものの、有意な差は認められなかったが、リスニング部門では5%水準での有意な向上が観察された。つまり、わずか3週間の海外研修であってもリスニング力は向上したということである。参加者のうちのある女子学生が研修後のテストを受けた直後、「リスニングテストの英語が、ゆっくりと、ちゃんと言葉として聞こえてきたのにびっくりしました！」と目を丸くしながら興奮気味に語っていたのを印象的に記憶している。この学生のリスニング得点は、30点満点中研修前が21点、研修後が26点であった。確かに点数も約1.2倍に上がっているが、彼女はその点数の伸び以上に英語の聞こえ方の違いを実感したかのように私には見えた。

また、今回のこの記事を執筆させていただくにあたり、本学のこれまでの短期海外研修参加者に郵送によるアンケートを実施したのであるが、「短期海外研修に参加して、英語力に何らかの変化はありましたか。」という自由記述形式の質問に対し、解答を寄せてくれた26名のうち半数に当たる13名が、「リスニング力に変化を感じた。」という主旨の記述をしており、上記の統計分析結果はその参加者の実感を裏付けるものとなっている。

その後、2009年春の研修では、やはり英語力の変化をみるために英検準2級の過去問題を用いた英語力テストと、加えて英語研修によるアウトプット力の違いを見るため、研修前後に全く辞書等の使用をせずに15分のエッセイライティングを行い、研修経験前と後の違いを観察する取組みを行ってみた。参加者の質は前回とほぼ同様で、人数は14名であった。ライティングのテーマは誰でも書きやすいようにと考え、“My Hometown”とした。

まず英語テストで研修前後の結果を比較すると、やはり総合点とリスニング部門で5%水準の有意な向上がみられ、前回の結果を裏付けるものであった。それと同時に、

前回の試みでは数が5問しかなく、変化を見るには十分ではなかったという反省を踏まえ、ライティング部門の問題（整序問題）の数を10問に増やして行ってみた結果、今回は5%水準での有意な向上が示された。整序問題ということは、参加者の語順に対する認識を計るものと考えるが、このレベルの学生にとって語順への認識が深まるということは、大きな意味があるのではないかと考えている。

エッセイライティングの結果の分析には、エッセイの総語数に加え、“T-unit”という、Hunt (1970)が提唱した単位を使用した。T-unit (Minimal Terminable Unit) とは、書かれた言語を分析するための単位で、「1つの主節とその主節に付加される従属節、加えて、主節の中に埋め込まれたり付加される句があれば、それらも含んだ言語単位」と定義され、T-unitの平均長が長いほど熟達した書き手とされているものである。また今回は特に、英語習熟度の高くない参加者が研究対象であったので、独自に考案したGlobal-error-free T-unit (文の意味の理解を妨げるような重大なエラーを含まないT-unit、略してGEFT)の数を分析の単位として取り入れた。つまり、「エラーはあるが、意味の理解可能なT-unit」ということであり、多くの学者が提唱するError-free T-unit (全く誤りのないT-unit)よりも、習熟度の低い被験者のライティング力の変化をより正確に反映するものと考えての使用であった (Kimura, 2011)。

エッセイライティングの結果を見ると、何よりも顕著であったのは総語数の伸びであった。研修前は52.57語 (SD 値¹は29.13)であった平均語数が、研修後には93.57語 (SD 値は37.06)へと実に約1.8倍に増え、研修前後のエッセイ語数をウィルコクソンの符号付き順位和検定で分析した結果、1%水準での有意な伸びが示された。意味の理解を妨げるような重大なエラーの含まれないT-unit (GEFT)の数においても、研修前は5.68 (SD 値は1.23)、研修後は7.29 (SD 値は2.20)で、やはり1%水準の有意な増加を示していた。参加者が実際に書いたものを目で見比べてもその量の違いは明らかで、研修前には文を書こうにも躊躇して書くことができず、15分という時間を持って余っていた観のあったものが、研修後には、エラーを犯すことを恐れずに思いつままに文を書き並べた、という印象のものが目立った。ただし、全T-unit数とGEFT数の比率を割り出し、参加者の書いた文の「正確度」の変化を見ると、そこには有意な差が見られなかったのも事実である。つまりは、3週間の研修を通して参加者のライティングの「流ちょうさ」は向上したが、「正確さ」は向上しなかったことになる。英語テストでは語順に対する認識が高まったことが示されたものの、3週間という時間が参加者の文法面や語彙面での正確度を統計的に有意に向上させるには十分な時間ではなかったと言えるであろう。

3.2 短期海外研修の情意面への効果

短期海外研修参加者の情意面での変化を探るために、これまでにOxford (1990)のSILLという質問紙を使った「言語学習ストラテジー」の使用度についての調査 (Kimura, 2009)、Willingness to Communicate (WTC)の質問紙を用いた調査 (木村, 2011)などを行ってきた。WTCを八島 (2004)は、“第2言語を用いて他者と対話する意思”と

¹ 標準偏差 (Standard Deviation) 値

説明している。

まず、言語学習ストラテジーについてであるが、Oxford (1990)によれば、学習ストラテジーとは知識の獲得、蓄積、想起、情報の使用を助けるために学習者が使う様々な操作であり、特に外国語学習では学習者の積極的で自発的な学習手法となるために重要であり、これを適切に使うことで言語能力は向上し、自律学習が促進される、ということである。言語学習ストラテジーは、記憶ストラテジー、認知ストラテジー、補償ストラテジー、メタ認知ストラテジー、情意ストラテジー、社会的ストラテジーの6つに分類される。

短期海外研修参加者19名(実験群)と非参加者24名(統制群)に対して、研修前後に行ったストラテジー使用度の調査結果を3元配置の分散分析で比較した結果は、実験群のストラテジー全体の使用度は研修前後で有意に高くなり、研修前には同質であった両群のストラテジー全体の使用度が、研修後には5%水準で実験群の方が高くなった、というものであった。更に実験群のストラテジー使用度は、研修終了後1カ月後に実施した調査においても高いまま維持されていた。とは言っても、実験群の一つ一つのストラテジー使用度については特に有意な伸びの認められた項目がなかったのは予想外であった。ただ、有意差は示されなかったものの、実験群の平均値の伸びが「メタ認知ストラテジー」で最も大きく、逆に統制群においては「メタ認知ストラテジー」の伸びが最も小さかったことは興味深い事実であった。メタ認知ストラテジーは、自己の学習の正しい位置づけ、自己の学習の順序立て・計画、自己の学習の正当な評価など、自らの学習過程の調整のための方略であり、実践の機会を求める、という重要なストラテジーである。そうしたことを考えると、実験群の「メタ認知ストラテジー」の平均値の伸びは、3週間の英語圏滞在を経験した参加者達が、研修参加前よりも英語学習に対してより自律性を身につけ、自分の目標を持って英語学習に対してより積極的になった結果なのではないかと推察している。

Willingness to Communicateの質問紙を利用した調査でも、意外なことに、研修前後で統計的に有意な差は、「知らない人と会話する」という項目以外はまったく現れなかった。それどころか、若干の差であり有意な差ではないものの、「1対1で話をする」という項目と、「友人と話をする」という項目で、WTCの値が研修後に下がっていたことは興味深い結果であった。正直言って海外滞在を経験した後には、多くの人や見知らぬ人と会話する場面でよりも、友人と話したり1対1で話をしようとするような場面において、「英語を話したい」という意思がより高まるのではないかと予想していたのであるが、結果はその逆であった。これは最近出席した学会のシンポジウムにおいて聞かせていただいた広島大学の深澤先生のご研究(2011)の中で、大学生の英語圏留学でのニーズを分析した結果、unfamiliarな人とよりもfamiliarな人と英語で話す状況の方が難しい、と感じた学生が多かった、という結果と合致していると感じる。思うに、研修参加前には大して深く考えず、「海外に行ったらたくさん英語で会話してくるぞ」と意欲に満ちて出発した学生が、現地において実際に英語で会話しようとする場面では、話したいと思う気持ちほど言葉が出て来ず、しかも1対1であったり、相手が友人であったりする場面の方が、それ以外の状況よりも深くて個人的な話になりがちで、英語で表現するのにより大きな困難を感じた、ということなのではな

いかと推察している。個人的には、このもどかしい経験も英語上達への重要な1ステージと捉えている。

英語テストのリスニングとライティング（整除問題）で研修前後の有意な差が示されたにも関わらず、英語テストの得点とWTC値の相関については、研修後の2つの項目（人の集まり、1対1）とライティングとの相関においてのみ有意な係数（それぞれ、 $r=.541$ 、 $r=.612$ ）が示され、リスニングとでは有意な相関がみられなかったことから、WTC、つまりコミュニケーションを取りたいという意味は、やはりインプット（この場合はリスニング）よりもアウトプット（この場合はライティング）とより強い関係があると言えるのではないかと考えている。

4. 最後に

参加学生に多く接する者として、上記のようなデータ収集結果からだけでは表せない学生の語学力や情意面の変化は多々あると実感している。前述の本学の過去の短期海外研修参加者を対象に実施した自由記述式のアンケートの結果であるが、26回答中、最も多い記述が、「海外へ行くこと、外国人と話すことに抵抗がなくなった」という主旨のものであった（17名）。また、「英語への学習意欲が高くなった、積極的になった」という主旨の回答が14有り、その他、「他国の文化に興味を持った・日本の文化を見直した」という主旨のものが11あった。こうした思いこそが、今後の英語力向上のみならず、参加者の視野を更に広げていってくれる変化であろうと私は期待している。短期海外研修は、彼らのその後の人生を大きく変えていく「引き金」となり得るものと信じている。

こうした海外短期研修の有用性を踏まえた上で、昨今の学生の多様なニーズにより良く応えていくためにも、今後に向けては本学の設置学科の傾向に合わせ、「短期語学研修＋インターンシップ」といった形式のものや、「短期語学研修＋スポーツ研修」、「短期語学研修＋音楽研修」など、多様なプログラムを企画・実施していくことが、目下の私の目標である。

今後も1人でも多くの感性豊かな若者が海外に出て、その秘めた無限の可能性を开花していくきっかけを作っていってくれればと切に願うものである。



アカロアへの一日旅行の途中で

引用文献

- Hunt, K. (1970). Syntactic maturity in schoolchildren and adults. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 35, Serial No. 134, 1-67.
- Kimura, K. (2009). The influences of studying abroad on language proficiency and the use of language learning strategies: In the case of a three-week English program. *KATE Bulletin*, 23, 47-58.
- Kimura, K. (2011). Effects of overseas programs on Japanese university students: Focusing on writing proficiency. *JBAET Journal*, 14/15, 59-74.
- Oxford, R. (1990). *Language Learning Strategies: What every teacher should know*. New York: Newbury House.
- 木村啓子. (2011). 「大学生の短期海外研修参加者のライティング力の変化とその情意的要因を探る試み—WTC 質問紙を利用して」 関東甲信越英語教育学会第 35 回研究大会における口頭発表. (2011 年 8 月 6 日 於: 専修大学).
- 日米教育委員会. (2011). 『米国留学情報』2011 年 10 月 15 日
<http://www.fulbright.jp/study/res/index.html> より検索.
- 深澤清次. (2011). 「英語教育における海外留学・研修の意義」日英・英語教育学会第 17 回研究大会におけるシンポジウム. (2011 年 9 月 於: 東京外国語大学).
- 八島智子. (2004). 『外国語コミュニケーションの情意と動機』大阪: 関西大学出版部.